

## 博物館で何をみるか

### はじめに

私は毎年イギリスに出かけることを旨としてきた。その理由を学生に訊ねられて、次の二つの説明をしてきた。ひとつは、専門のイギリスの経済・経営の歴史を研究するためには、現場に行かなければわからない。たしかにそれぞれのテーマに関しておびただしい研究があり、いまや情報化の時代であるので、日本にいてもそれらは容易に入手することは可能となった。しかし、現場に行かないと分からないことが多い。私をはじめてロンドンの地を踏んだのはいまから三六年ほど前になるが、そのとき驚いたのは、これほどまでに多くの肌色の違う人々が街を行き交っていることであった。そのようなことは経済や経営あるいは歴史の本にはあまり書いていない。じつはこのようなきまざままな出身母体を持つ人たちがイギリスという国を構成しているということを改めて思い知らされた。要は、自分の目で見、肌で感じたことを視野に入れて、イギリスの研究を進めないと地に足を下ろした研究とはならない、と考えるようになった。そのような意味で、私は出来るだけ多くの機会を捉えて、イギリスを訪問することになっている。

湯 沢 威

ふたつには、外国の研究をする人の多くが考えているのではないかと思うが、最終的には自分の国をよりよく理解するための手段として、外国のことを研究するということである。私は、日本においてはわからない側面が、外国にいると手に取るようにわかるようなことがある。たとえば、日本の経済が不景気であると言われ始めた一九九〇年代以降、ロンドンに進出していた日本のデパートや日本料理屋の多くがいち早く撤退した。それまで日本のバブル景気に押されて、ロンドンでも日本のデパートや高級日本料理店が幅を利かせていた。ビジネス用の接待として、また大勢の日本人観光客を目当てにして、高級日本料理店が店を開いた。しかし、不景気の波が押し寄せると、いち早く撤退を開始したのである。日本にはなかなか実感をもってうけとめることの出来ない不況の波を、地球の裏側ではいち早く感知することが出来た。日本の企業からすれば、遠いイギリスの店舗で採算割れをするような事態が起これば、いち早く撤退の指令を出したのであろう。何よりも横並びで開設した大企業のロンドン駐在事務所などの閉鎖は、接待用の日本料理店の数を減少させることになるであろうし、日本人観光客の減少も当然日本のデパートや日本料理店の顧客の減少に結びついた。日本の国内においては肌身で感じ取れない現象が、遠くロンドンではいち早く起こっていた。すなわち外側から見ると、内側からしかモノが見れない人とは異なった角度からモノを見ることが出来る。日本の良いところ、悪いところ、あるいは日本にはあまり思うことのない愛国心のことなども、海外に出ることによって、改めて考えさせられることになる。私はこのような説明を学生にしてきた。

しかし、待てよ。もしこのロジックが正しいとすれば、イギリスの研究をするためにイギリスでの調査研究は必要であるにしても、イギリスだけを見ていたのでは限界があるのではないか、ということに気づいた。すなわち、イギリスを外側から見ていかなないと客観的なイギリス像が描けないのではないかということである。そこで、二〇〇八年九月からサバティカルの機会に恵まれたので、旧イギリス帝国の辺境地の一部を見て回ろうと計画した。最盛期のイ

ギリス帝国は世界の四分の一を支配していたのであるから、それをすべて見て回るなど、不可能なことである。私はその辺境に当たる部分のほんの一端を垣間見るにすぎない。

外国を訪れて、その国を理解するための手っ取り早い方法は、その国や地方の博物館を訪れることである。博物館にはさまざまな種類がある。文化や芸術、歴史や科学技術、自然科学など、その国や地方を代表するものをまとめて展示をしている。博物館には、それぞれの土地の誇る社会、歴史、自然などの文物を展示している。ここでは博物館を通してイギリスという国を考えてみたい。

## 一 博物館の役割

そもそも博物館とはなんだろうか。博物館の使命は自然界に存在するもの、人間生活の営みに関係するもの、あるいは人間の叡智や芸術など文化的に価値の高いもの、さらには人類の歴史的遺産など、森羅万象のあらゆるものを人類の知的好奇心の対象として、収集し、展示するものである。しかし自然界の生み出したもの、あるいは人間が生み出したものを人類の共通の財産として保存の対象と考えたとしても、現実には保存や展示の対象となるものは、きわめて限られたものでしかない。たとえば歴史保存の対象物には一定の限界があることである。歴史的保存の対象となるものとして、王侯貴族の所持していた金銀財宝、世界にまれな貴重品、あるいは技術的に保存の対象として運よく残ったもの、さらには収集する側が無数の保存の対象物から、何らかの方針のもとに収集したものなどがある。支配者や金持ちの所有物が保存の対象としやすい、ということになるが、それでは歴史の全体像や過去の事実を伝える

手段としては限界がある。そこで民俗や庶民の日常生活を歴史保存の対象にしなければならない、という当然の主張が起こる。しかしこれについてもその網羅性については限界がある。いずれにせよ、人類共通の財産として保存すべき対象物には偶然性や「恣意性」がどうしても回ることになる。

博物館はそれぞれ展示する目的を持ってはいるはずである。博物館が保存物を展示する場合に、博物館の思想性やコンセプトがそこに盛られることは当然であろう。無数の保存物から何を選ぶか、またそれをどのように展示するか、博物館の思想性が問われることになる。なぜなら、博物館の果たすべき役割のひとつとして広く社会教育の目的を達成することも含まれているからである。保持している展示物を単に機械的に羅列したのでは、見るものの興味も引かないし、その価値もわからない。博物館は一つ一つの展示品の意義、価値、そのものの背景、また入手の経緯などを説明することによって、展示物の価値を説明する必要性がある。それは厳密な学術的分析手法によって行われなければならない。そのような学問的裏づけのない展示物は、単なる骨董品の陳列に過ぎなくなる。骨董屋めぐりと博物館見学との決定的な相違は、骨董屋は、市場の動向や顧客のニーズに対応して陳列品の選択や陳列の方法を考えるであるが、博物館は、一定の思想性に基づいて、展示品を選択し、またそれに学術的な説明を施すことによって教育的目的を達成する。

## 二 博物館の存立条件

ところで、博物館にはさまざまなものが存在する。保存の主体で分ければ、国、地方などの公共体、それに民間の

ものなどに大別される。当然展示対象物を展示するための土地、建物などが必要となる。またそれを維持管理するための人材、技術、資金が必要となる。そのためには一定の経済力が要求されることになる。国や地方の社会的インフラ整備の一部としてどこまで公的資金が投入出来るか、それぞれの文化行政の基本姿勢が問われることになる。あるいは民間であれば、特定の篤志家や幅広い市民からの支援が必要となろう。博物館の収入は、ほとんど期待できない、と考えなければならぬ。博物館入場料を無料としているところも珍しくない。したがって、入場者からの収入などを当てにしないで、博物館経営を考えなければならない。

衣食足りて、礼節を知る、と言われるが、博物館を提供するためには一定の生活基盤や経済水準のもとにはじめて可能かもしれない。もちろん、お金をかけなくても、優れた博物館が存在することを否定するものではない。しかし、規模や展示対象物の内容、さらにはその質の維持という点では大きな制約を受けることになる。一般的には、公的資金や民間の経済力を背景にしなければ、質の良い博物館の体制は取りにくい。

博物館の質の維持には一定水準の経済力を前提にするが、しかしその中でもそれを維持管理する優秀な人材の確保が重要であろう。すぐれた自然的、社会的、歴史的遺産を持ちながらも、それらの展示品に対する学術的にかつわかりやすい説明がなければ、その意義や価値を理解してもらえない。さきにも述べたように、博物館は単なる無機質な収蔵所ではなく、立派な主体性をもった社会教育的存在である。博物館のメッセージが展示品を通して伝わってくる。そのような博物館の主体の形成にとって、優秀な人材の存在は不可欠である。

さらに、博物館の成立要件として必要なものは、国や地方の博物館に対する考え方である。文化行政の一部として博物館が位置づけられ、それを保障する体制が要請される。それは先に指摘した財政的支援に加えて、博物館それ自体がそれぞれの目的のもとで独自に資料の収集、研究、展示をすることを保障することであろう。それは、たとえて

言うならば、大学の存立条件に学問の自由と大学の自治が不可欠の要件であるのと同じように、博物館の主体の尊重ということである。行政当局は博物館の立場に対して政治的に中立的でなければならぬ。国や地方公共団体はこのような博物館の自主性を守ることが、その国や地方の文化水準の尺度にもつながるものである。

博物館は、事実をありのままに展示し、そのためには学問的であり、また政治的には中立的でなければならぬ。しかし、博物館には目的があり、主体性を保持しており、思想性を持っている。とくに博物館には社会教育的目的があり、そこで思想性が鋭く問われることになる。博物館は、厳密な事実の検討、情報の確な選択、客観的な価値判断がなされているか、を自ら慎重にチェックをしなければならない。しかし、そのことは博物館が主体性を持つこととは矛盾するものではない。歴史家は、歴史事実を特定するために、厳格な資料批判に基づいた対象物をあらゆる角度から検証し、事実の特定をはかる。もちろんそこに絶対性を求めていかなければならないが、それはきわめて難しい。歴史博物館の場合には、このような厳密な歴史的事実に基づいた、客観的、普遍的に価値のあるものを展示することがその任務となる。博物館は、たとえ民間の博物館であっても、それは公的な存在であり、公的博物館と類似の水準を求められることにならう。

### 三 大英博物館 (The British Museum) の事例<sup>①</sup>

世界で最大級の博物館のひとつがロンドンにある大英博物館 (British Museum)<sup>②</sup> である。そこには世界各地から集めた金銀財宝、芸術的作品、歴史的遺物、自然界に存在した稀有品などを網羅している。まさにここには世界の歴

史と文物が凝縮されて展示されている。歴史的には、現在の自然史博物館、大英図書館などが次第に分離独立してきたが、根っこはひとつである。<sup>(3)</sup>そこに行けば、自然界の進化の説明から、人類史の流れ、世界各地の民族の生活、過去と現在の世界を網羅的に理解できるように工夫されている。このようなことが出来たのは、七つの海を支配して世界に君臨した大英帝国の存在と切り離して考えることは出来ない。

大英博物館は一七五三年に国王の認可を得て開設されたが、近代的な博物館としては最古のものである。開設以来の博物館の基本理念は、以下の三原則に基づいている。博物館の所蔵物は、永久に保存され、包括的に収集され、かつそれらは専門家によって一般に公開されなければならない。これは大英博物館の基本理念であるが、おそらくはイギリスの多くの博物館の基本理念にもなっているものと思われる。永久的に保存するということは国の永続性を前提とする。イギリスはこれまで多くの国を支配したことはあっても支配されたことはないという自負が込められているように思う。包括的に収集するということは、人類がこれまで歩んできた軌跡に関連するすべてのものが含まれ、それは国内は言うまでもなく世界を対象とする。それは人類や世界を視野に入れた資料の収集ということであり、普遍性の追求ということであろう。そして、公開性。これがイギリスの多くの博物館で入場料は無料という原則の原点になっていると思われる。貧富に関係なく誰にでも公平に機会を与えるという原則である。イギリスの経済の落ち込みから、国の財政援助が難しくなっても、宝くじや寄付金さらには自らの営業活動でなんとか無料の原則を持続している。

大英博物館のこの公開性は、所蔵物そのものが人類共通の財産という公的性格を持っており、したがってそれは国内のみならず世界の人々にも開放することが義務と考えている。たしかに、大英博物館には、ギリシアのパルテノン宮殿から剥ぎ取ってきたものやエジプトから運び込まれた多くのミイラなどがあって、「略奪」との批判があるが、

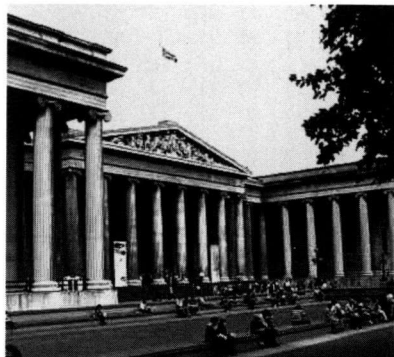
しかし大英博物館側は、それらは人類の共有財産という認識で所有し続けているものと思われる。

「大英博物館のコレクションは公開され、かつ誰でも自由に見学できるべきだという基本原則に立っている。それは、人類の文化は、それぞれの違いがあるにもかかわらず、相互の関係を持つことによって、お互い理解することが出来るという啓蒙的理念に基づくものである。大英博物館は、このような人類の異文化間の調査研究が行われるべき場所でなければならぬし、現にそうなっている。

大英博物館は、このような見学者とのかかわりを拡大することによって、より広範囲な、世界からの見学者と接触することを目的としている。それは、大英博物館が所有するコレクションを通じてのかかわりだけではなく、それらコレクションが表現する文化や地域、それらコレクションが語る物語、それらコレクションが解き明かす真理の多様性、そして現代世界でそれらコレクションのもつ意義とのかかわりである。」(BMホームページより)

ここに、大英博物館の理念が述べられている。たしかに、イギリス帝国は多くの植民地を支配し、植民地から金銀財宝やさまざまな貴重な歴史的遺産を本国に持ち込んだ。しかし、大英博物館は、それら全世界から収集(あるいは収奪)したものを全世界の共有財産として、それを保存し、公開し、それを全世界の人々が学ぶことによって、人類の文化の向上に貢献させようとする、崇高な理念をもって管理しているのである。もちろん、これらの原則によって、世界から集めた大英博物館の所蔵物の帰属問題がすべて解決するかは依然として問題は残るであろう。しかし、所蔵物が大英博物館に帰属する限り、人類の共通財産として責任を持って管理し、広く世界に公開することであれば、第三者としては歓迎せざるを得ない<sup>5)</sup>。ある意味では、大英博物館が主張するように、世界の至宝がロンドンの一箇所に集められていることは、世界のさまざまな文化を比較し、研究するには便利でもある。しかし、ギリシアなどでは大英博物館の宝がイギリスにわたってしまったので、大切な観光資源を失ってしまうという痛手が生じていることは否定





大英博物館正門

できない。<sup>(6)</sup>

大英博物館が強調するのは、世界各地からあらゆる文物を収集して、各国はそれぞれ独自の文化、歴史、風俗習慣を持っているという認識である。<sup>(7)</sup>これは自国の社会や歴史・文化を中心にすえた博物館の考えでは、なかなか持てない視点である。異文化を尊重し、それによって世界の多様性を知ることが、これはまさしく世界が本当に分かり合えるための原点であるように思われる。

ところで、大英博物館は展示を行うにあたって、以下のような原則を立てている。<sup>(8)</sup>

- 一、過去および現在の世界の文化について知識と理解を深め、かつそれら文化の相互の関係を深めること。
- 二、すべての見学者は素性、人種、国籍、性別、障害あるいは学識とは関係なく、知的にも、視覚的にも刺激をうけ、かつ楽しめるようにすること。
- 三、見学者が繰返し訪問し、また新たな見学者が訪れることによって、支持者を増やすこと。
- 四、世界の文化、人種そして国家相互の良好な関係とより良き理解を促進すること。

五、世界で最高の博物館の一つとして、そして学術の中心として、国際的な名声を高めること。

実際に大英博物館の展示にあたっては、以下のように述べている。「それぞれの展示は、明確なテーマや（見学者の要求に応えるという）目的を深める意図をもつ」。これは博物館の主体の意思および見学者のニーズの双方から、テーマの設定のもとに展示がなされることを謳っている。さらに「大英博物館は、完全無欠の状態で、しかも文化的相違に配慮して対象物を展示するであろう。与えられる情報は信頼されるものであり、最新のものである。ある特定の展示物が、見学者のある特定の人々に不快感を起こさせる、と当然想定される場合にはいつでも、大英博物館は見学者に対して、もし望むのであれば、これら特定の展示物を見ないように警告を発する」（BMホームページより）。展示する側の意図と見る側の意図が合わない場合には、もちろん、博物館は見学者を強制するわけにはいかないのです。事前に通告することにより、見学者側の不快感を除去しようというものである。これはどのような対象物を指して述べているのか、必ずしも明確ではないが、おそらくはミイラなどが想定される。人によっては極度の不快感をもよおす可能性がある。

創立二五〇年を契機に、大英博物館は大きく変わった。正門玄関から入ったあたりは昔の面影はほとんどなくなった。要するに、全体が明るくなり、近代的なデザインが取り入れられた。たしかに旧来のイメージを一新して新しい博物館のスタイルを模索しているように思える。大英図書館（The British Library）が分離・移転されて、展示物のスペースが広くなり、二一世紀に対応した新しい博物館づくりを行っていることがわかる。

私は次にタイの歴史博物館の事例を取り上げてみたい。社会や歴史に関する博物館では、どのようなテーマを設定するか、そのために展示対象物をどのように取捨選択するか、またそれらをどのように強弱を持たせながら展示をするか、そこにも当然博物館側の思想性やコンセプトが問われる。歴史博物館のような場合には、歴史観を背景に、歴

史事実をどのように捉え、それをどのように説明するか、博物館のメッセージが直に見学者に伝わってくる。<sup>(9)</sup>

#### 四 タイにおける鉄道博物館—ひとつの事例

何をどのように見せるか、という点で印象に残ったのは、タイにある泰緬たいてん鉄道博物館である。これは映画「戦場にかける橋」<sup>(10)</sup>で有名な舞台となったところで、第二次世界大戦の時に、日本軍がイギリス人、オーストラリア人、オランダ人などを捕虜にして、鉄道の建設に駆り立てた、と非難されるところである。私は、ここがヨーロッパ、オーストラリアの対日感情のルーツの一つであると考えている。しかし、私が、この博物館について、タイの歴史や現状に詳しい知人に尋ねたところ行ったことがないと言う。また、長年タイに住んでおられる学習院の大先輩に伺っても、行ったことがないと言う。タイの専門家やタイ在住の日本人からは異質の存在なのであろうか。

私は夏をイギリスで過ごすことが多いが、毎年八月になるとJVD（対日勝利記念日）の催し物がいろいろ行われ、その時に話題になるのがこの橋である。この時期になると日本人として肩身の狭い思いをする。その理由のひとつが、テンコーというドラマがイギリスのBBCから放映されることであった。これはイギリス人の日本人観を形成する上で極めて強い影響力をもつものと思われる。第二次世界大戦の時、日本軍に捕らえられた捕虜生活のドラマである。毎朝、日本の兵隊に点呼をとられたので、それがテンコ（Tenko）という題名となった、という次第である。一九八一年から八四年までBBCから放映され、その後も繰り返し放映された。たしか日曜日の夕方のゴールデンタイムに一時間で、三〇回シリーズであった。なお、このドラマはオーストラリアでも同じように放映されたようである。



連合軍共同墓地

このドラマの内容についてここで詳しく紹介する余裕がないが、概略以下のようである。<sup>(1)</sup>

日本軍は一九四一年にシンガポールを攻略したが、その時にイギリスのご婦人はイギリスに向けて脱出を試みたが、船が難破し、日本軍に捕らえられ、捕虜収容所に入れられた。彼女たちがオランダの捕虜とともにいかに辛酸を嘗めたか、またそこに改めて人間関係や自分たちの人生を見直す機会ともなったことなどが描かれる。また、悪意に満ちた日本人の捕虜収容所の所長が登場し、捕虜をいじめる模様が描かれる。そして最後に日本の敗戦で、捕虜は自由の身となり、シンガポールでの生活に戻るが、それに適応するのに苦勞する模様が描かれている。

私は、バンコクから観光バスを予約して出かけた。大型バスには半分ほどの乗客が乗っていたが、日本人は私一人らしい。タイ人による英語のガイドで一路カンチャナブリーに向かった。途中バンコク市内のような渋滞はほとんどなく、約二時間で現地に到着した。

まず、広大な連合軍共同墓地が左側に広がる。ヨーロッパ的な墓地の作りであり、一つ一つの墓碑には名前と所属、それに



泰緬鉄道博物館

遺族からのメッセーが彫られているものも多い。

この墓地の横に「死の鉄道博物館」がある。建物の正面には、博物館とは書いてなく、小さく「The Thailand-Burma Railway Centre」と書いてある。これは民間の博物館であり、通称、泰緬鉄道博物館とか「死の鉄道博物館」とか呼ばれているものである。館長はロッド・ベッティ（Rod Battia）というオーストラリア人であり、在野のこの鉄道の研究家である。博物館の中は撮影禁止であるので、建物の外の風景を紹介するだけである。戦没者墓地への来訪者は一日平均一〇〇〇人と見られているが、そのほとんどがこの博物館の入場者と考えると、その数は年間三〇万人に及ぶのではないかと思われる。私が訪れた時も多くの人観光客であふれており、かなり採算の良い博物館であろうし、またタイにとっては一大観光資源となっている。

中に入ると歴史的背景の説明がないまま、いきなりアジアの地図に描かれた日本の大東亜共栄圏が示される。なぜ、アジアに大勢のイギリス人やオランダ人などがいるのか、旧宗主国が植民地支配をしていたことの説明は抜きである。また第二次世界大戦前の植民地支配体制に対して日本は「侵入者」として表

現される。イギリスがインド、ビルマ、香港などを、またオランダがインドネシアを植民地にしていたことは「侵入」ではなかったようである。日本が第二次世界大戦に突入して間もない、一九四二―三年に日本軍が破竹の勢いでイギリス、オランダ軍を打ち破って、大勢の捕虜を収容することになった。<sup>(12)</sup> 展示の内容は、捕虜収容所の模様が仔細に説明される。当時使用していた鍋、釜、食器、飯盒などを展示しつつ縷々説明が加えられる。多くの写真によって捕虜収容所での悲惨な生活の姿が写し出される。

そこから鉄道建設の場面に及び、捕虜がどのように建設現場で働かせられたかの様子が説明される。捕虜となったのはイギリス人三万人、オーストラリア人一万三〇〇〇人、オランダ人一万八〇〇〇人、アメリカ人七〇〇人などで総勢六万人以上に及んだ。彼らはインドネシア、香港、シンガポールなどイギリス、オランダの植民地から連れてこられた。これら捕虜のうち、この鉄道建設のために労働や病気で死亡したのは一万六〇〇〇人に及んだ。しかし、それらをはるかに超える東南アジアからの労働者たち、一〇万人以上が死亡した。枕木一本を敷くのには人の命一名を失うといわれるほどの過酷なものであった。その意味で、外国では広く「死の鉄道」と呼ばれている。またこの博物館も「死の鉄道博物館」と通称いわれる所以である。欧米の最先端の展示技術を使いながら、リアルにわかり易く説明されている。見る人の心には、旧日本軍隊の悪行を伝えるだけでなく、日本人そのものが残酷な人種であるかのごとき印象をうける。

実は、このクワイ川橋を巡っては、日本でもさまざま取り上げられ、旧日本軍人が謝罪に出かけたり、陸橋の上で、元イギリス人捕虜、エリック・ローマックス (Eric Lomax) と旧日本軍憲兵の通訳をしていた永瀬隆の和解のプロセスなどについての「クワイ川橋以降」(Beyond the Kwai River) の話は見当たらなかった。二人が橋の上で握手をし、ローマックスから最終的に赦しを得る写真は、ロンドン滞在中のタイムズ紙に大きな写真が掲載されていたのを

記憶している。二人が最後に行き着いたのは、人間性への理解、戦争への憎悪であった。そのほか和解の試みは、政府や民間でさまざまな形で行われ、たとえば在タイ日本大使館などは終戦日（イギリスではJVD）八月一五日はいろいろな催しを行っている。もちろん旧日本軍の行った行為を糾弾することは重要であるが、それに終わらずに、ローマックス、斉藤両氏の和解の話や、さらに戦争そのものの醜さを訴えることまでもこの博物館に期待するのは無理なのであろうか。

一九九五年八月一五日、対日戦勝記念五〇年周年の記念行事がイギリス各地で行われ、ロンドンでも盛大なパレードが行われた。私はこれをロンドン大学教授と見に行った。上空を第二次世界大戦時に活躍したスピットファイア戦闘機が飛行し、当時の従軍兵士が隊ごとに列を作って行進していた。その時、行進中の元兵士の一人が血にまみれた日章旗を懐から取り出して目の前で掲げはじめた。その時にはさすがに私も感情が込み上げて目頭を押さえた。隊列はどここの出身で、どこに従軍したかを解説していた。それから判断するとおそらくインパール作戦の時に日本兵から奪った日章旗だったようである。日章旗には漢字が見える。おそらく戦死した日本人兵士は家族や友人の署名入りの旗を大切に持っていていったのであろう。イギリスの退役軍人はそれを戦利品として後生大事に保持して、この時とばかりに大衆の前に見せびらかせた。しかし、さすが、周囲で注意をする人がいたのであろうか。その退役軍人が視界から消える頃には、日章旗の姿は消えていた。その時に、私はイギリス人およびイギリス退役軍人の対日感情の根強さをつくづく感じたものである<sup>(13)</sup>。

館長のベッティ氏は、肩書きには「死の鉄道」の研究者かつ歴史家となっているが、彼の著した小冊子、『泰緬鐵道—クワイ川にかかる橋の真実の物語』(The Thai—Burma Railway—True Story of the Bridge over the river Kwan)を開いてみるといろいろ間違いがある。まず日本の近代化の過程について数行説明があるが、ペリーが一八

六七年に日本にやってきて開国を説得した<sup>(14)</sup>、とか急速な工業化の結果、日本は太平洋地域で圧倒地位を築き、中国とロシアと衝突して一九〇五年に勝利を収めたとか<sup>(15)</sup>、初歩的なミスが多い。研究所となっているのに、このような歴史認識ではほかのところでの正確さに不安が生まれる。

この博物館からバスで一〇分ほど移動すると、例のクワイ川にかかる橋に行き着く。橋のたもとには小さなプレートが立っている。それはアメリカの退役軍人が立てたものである。ここには、次のように記載されている。

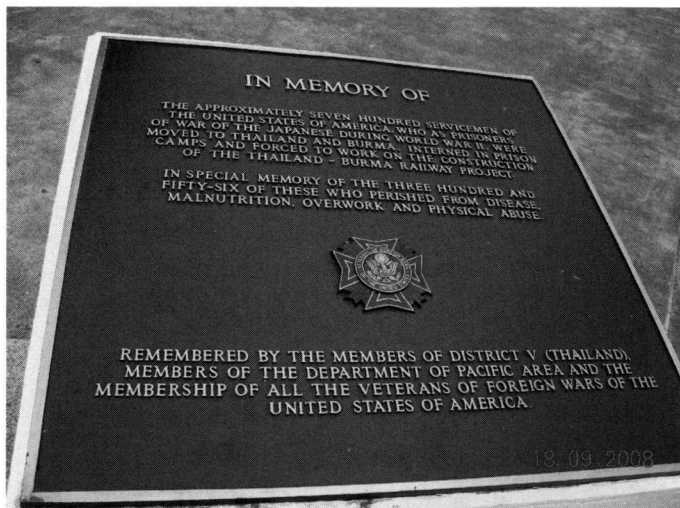
約七〇〇人のアメリカの兵士が第二次世界大戦中に日本の戦争捕虜としてタイとビルマに移送された。捕虜収容所に入れられ、泰緬鉄道建設に強制的に働かされた。病気、栄養失調、過労そして肉体的虐待によって死亡した三五六人に対する特別の思い出として―第五師団(タイ方面)の隊員、太平洋方面隊員、そして全米対外戦争退役軍人によって、記憶されている。

中央の記事の中には、全米対外戦争退役軍人と記入してある。記述は淡々と書かれており、死亡の原因についても、日本軍の虐待とともに、病気、栄養失調などを原因として挙げている。戦争捕虜をこのような形で労働させること自体、国際法上違法であり、しかも無謀な計画のもとで鉄道建設を強行した日本軍部の責任は免れないが、当時の状況の中でほかにどのような選択肢が残されていたのか、後世の人間が軽々しく判断は出来ない。問題はこのような事実を真摯に受け止め、それをどのように教訓としていくか、ということではないだろうか。

ところで、現地タイの人たちは、この泰緬鉄道をどのように見ているのであろうか。それを知る手がかりとなるのは、クワイ川鉄橋駅の背後にひっそりと建てられているカンチャナブリー州の石碑である。かなり長文の文章が御影石に白く刻みこまれている。文章は以下のようである(一部省略)。

「クワイ川に架けた橋は、日本がアメリカとイギリスに宣戦布告をした大戦、それはのちに第二次世界大戦の一部となるものであるが、その大戦中に建設された。橋は一九四二年一〇月に建設が開始され、一九四三年の一〇月に完成した。一九四二





全米対外戦争退役軍人記念碑

年の九月に日本軍はタイ政府とタイからビルマ（現ミャンマー）の間の戦略的な鉄道建設のための契約に調印した。<sup>(16)</sup> 鉄道はバンボン駅から五キロ離れたところのノンプラダク駅から始まり、カンチャナブリ州のムアング地方のバン・タマカンでクワイ川を渡った（当時そこは、「バン・タ・マ・カン」と呼ばれ、馬が渡る場所を意味した）。・・・鉄道の全長は四一五キロメートルであり、三〇三・九五キロメートルがタイ領、一一一・〇五キロメートルがビルマ領であった。マラヤ、シンガポール、インドネシアその他太平洋地域の国から連行された戦争捕虜が鉄道建設に駆り出された。彼らは南から列車に乗せられ、バンボン駅で降ろされた。カンチャナブリに到着するまで五一キロメートル歩かなければならなかった。戦争捕虜はイギリス、オーストラリア、オランダの兵隊によって構成されており、同時に約二〇万人におよぶマレー人、中国人、インド人、ビルマ人、ジャワ人労働者が建設に従事した。鉄道建設は、奥深いジャングルと高い山、それに危険な動物がいたるところにいて、大変厳しく困難を極めた。もっとも困難なところはクワイ川に橋を架けなければならなかったところであった。飢えとマラリアなどのおそろしい病気の中で、過

酷な作業が昼夜続いた。戦争の残虐性 (the brutality of the war) が一〇万人以上の戦争捕虜と労働者の命をうばった。こ  
から、この鉄道が「死の鉄道」と呼ばれた。<sup>(17)</sup>

日本軍はタマカーンで橋を建設することを選んだが、そこは土壌が硬く建設に適していたからである。工事を急がせるため  
に、日本軍は現在の橋よりも一〇〇メートル離れたところに仮の木製の橋をかけ、建設資材を運んだ。それを完成させるのに  
三ヶ月かけた。現在の鉄橋はインドネシアから運び込まれたものである。三〇〇メートルの橋梁は一一の鉄の梁(はり)から  
成り立っており、そのほかの部分は木製である。全体の建設期間はわずか六ヶ月であり、全長は四一五キロメートルであった。  
公式的な開通日は一九四三年一月二八日であった。木製の橋は水路の妨害になるとのことでのちに撤去された。戦争の時  
には、クワイ川にかかった橋は、連合軍によって重爆撃を受けた。四から六までの梁は破壊され、使用不可能となった。つい  
に、日本は一九四五年八月一日に降伏した。戦後、イギリス政府はこの鉄道と鉄道に関連するすべての資材をタイ政府に五  
〇〇〇万バーツで売却した。<sup>(18)</sup>のちに、タイ国有鉄道は橋を修理し、二つの梁を取替え、六箇所の木製のところは鉄の梁に置き  
換えた。橋は現在に至るまで使用されているのである。」

これはタイの公式の見解のひとつと考えて良いのではないだろうか。かなり客観的に史実を捉えていて、感情移入  
の部分は感じられない。すなわち、日本の鉄道建設はタイ政府の正式な認可を得て建設されたものであり、その正当  
性が指摘されている。また、死者に対しては、奥深いジャングルでの危険な動物、飢えとマラリアなどのなかでの難  
工事で大勢の死者が出た。日本軍の残虐性を強調するよりも、むしろ「戦争の残虐性」という表現が使われている。  
日本軍は驚くほどの速さで工事を完成させたことを指摘している。そして、連合軍の爆撃によって橋は使用不能にな  
ったが、イギリス政府はそれをタイ政府に五〇〇〇万バーツで売却した、という。しかも、ここにはタイ国有鉄道が  
橋の修復をした、と書いてあるが、どうもそれには日本政府も一役かかっていたようである。戦後賠償の一環として日



カンチャナブリー州の石碑

本政府がこの橋の修復に貢献した、との記録がある。<sup>19)</sup>

今回、私はタイを訪れた時には、時間的余裕はあまりなかった。また私がたまたま利用したバスツアーは、この博物館と汽車に乗って鉄道建設の難所を体験するというもので、時間的にはまったく足りなかった。実は、このほかに J E A D T H という名前の戦争博物館、さらには旧日本軍隊が建設した慰霊碑などを見ることは出来なかった。改めてこれらの場所を訪れて、この泰緬鉄道の持つ意味、また諸外国の対日観などを考えてみたい。

### おわりに

博物館の役割とは何か、を改めて考えてみた。これまで何気なく訪れた博物館であるが、実は博物館にはその国や地方の文化の尺度としての側面がある。良く出来た博物館は学問的な裏づけがあり、展示に工夫がなされ、わかり易い説明が施されている。そのためには、優れた専門家による、展示品に対する厳

密な学問的かつ客観的な説明が必要であり、それを可能にする施設の規模や機能が必要とならう。国や地方の文化行政の姿勢が問われることになる。

博物館は老若男女が気軽に訪れることが出来る場所であり、有力な社会教育の場でもある。したがって、社会教育的機能をもつ博物館は、理念、見識、方針を持つ主体的存在である。しかし博物館が主体性を持つからと言って、主観的に一方的なイデオロギーの注入の場とすることは許されない。民間の博物館といえども、一般大衆を入場者とするのであれば、それは公的な性格を持つことにならう。<sup>(21)</sup>

大英博物館は、かつて世界に君臨した自負の延長上に、その存在意義を位置づけている。大英博物館は、人類文化の発展の軌跡を追求し、その遺物を人類共通の財産とし、それを広く公開して、世界の人々が相互の文化を尊重しあう、という崇高な使命を持っている。したがって、「略奪」した他の国の歴史遺産も所有する権利がある、と主張する。たしかに、国の枠を超えて、どこかに普遍的に価値あるものを集約し、維持、管理するところがあっても良いかもしれない。大英博物館は、文化の単なる一国的 national centre ではなく、international centre としての機能を果たそうとするものである。それは文化の集約と比較であって、特定の文化の排除や文化の独占ではない。

大英博物館が追求するのは、世界の文化の多様性を尊重する、という立場である。ここでの文化は広い意味で、宗教も政治形態も包括するものであろう。それぞれの文化の固有の価値や伝統を認めることが、世界理解につながるという思想である。このような高い理念をもった博物館が世界に存在する必要があると思う。現在、大英博物館がそれに近い存在ではないかと考えるが、もちろんそれに匹敵する博物館、あるいはそれを超える博物館がこれから出現することは可能であらう。大げさな言い方をすれば、それが今後の世界の文化の牽引者になりうるものと思われる。

ここで事例としてあげた泰緬鉄道博物館は民間の博物館であり、一般の博物館とは異なるかもしれない。しかし、

この博物館には強烈なメッセージがこめられており、それを見る者にはさまざまな思いを錯綜させる。いずれにせよ、このような場所が、欧米人の日本人イメージ形成に大きな影響力を持っていることをわれわれ日本人は知らなければならぬ。したがって、このような博物館を出来るだけ多くの日本人が訪問し、欧米人の日本人観が、このような博物館をフィルターとして形成されていることを改めて認識し、その上でわれわれの真の国際理解が始まるのではないかと思う。

注

- (1) 私が最初に大英博物館を訪れたのは一九七二年のことである。それ以来毎年のように英国を訪れてきたが、その主要な目的は大英図書館にあった。しかしこの三〇年以上見ているが、大英博物館の賑わいは変わらない。
- (2) 大英博物館については、手に入りやすい参考文献は藤野幸雄『大英博物館』(岩波新書、一九七五年) 出口保夫『物語 大英博物館』(中公新書、二〇〇五年) がある。人文、社会科学の分野が主であり、自然科学に関する展示物は自然史博物館(Natural History Museum)として一九六三年に分離独立した。また松居竜五、小山騰、牧田健史『達人たちの大英博物館』(講談社選書メチエ、一九九六年) は、大英博物館と日
- (3) 現在、大英博物館は人文、社会の分野が主であり、自然科学の分野については一八八三年に自然史博物館(Natural History Museum) として分離され、サウス・ケンジントンにある。また、大英図書館は、一九七二年に法案で分離が承認され、一九九八年にセント・パウルスに新設オープンした。
- (4) ナポレオン戦争のときに、イギリス軍を指揮していたエルギン伯爵は、上陸したアテネ・アクロポリスの丘に立つパルテノン神殿の美しさに目を奪われて、大理石で作られた人物像のレリーフをはがして、ロンドンに持ち帰った。ギリシアはこれの返還を強く求めている。
- (5) だからと言って、イギリス帝国主義の植民地からの

遺物の略奪を容認するものではない。ただ、現地においても、大英博物館と同じような考えで、保持・管理し、広く世界に公開する体制が取れるかどうかが鍵であろう。

(6) 大英博物館のミイラやロゼットストーンはエジプトに返さなくてはならないであろう。しかし、類似の問題はパリのルーブル博物館にもある。ルーブルにあるミロのヴィーナスはギリシアに、モナリザはイタリアに返還しなければならなくなる。いずれも、それぞれを代表する展示物である。

(7) The British Museum, About us, ホームページより。

(8) The British Museum, Policy and Display, ホームページから。

(9) 歴史博物館の専門家は以下のように述べています。

「実際に展示構成を考案する研究者自身の思维過程を含めて見せるような、そしてそれを観る側との間での自由な議論が行われ、それに基づいて常に改善することが可能な展示が必要だと考えます。久留間浩「国立歴史民俗博物館における博物館教育の試み」(人間文化研究機構国立歴史民俗博物館編『歴史展示のメッセージ―歴博国際シンポジウム「歴史展示を考える民俗・戦争・教育」

アム・プロモーション、二〇〇四年) 一三九頁。

(10) この映画はアカデミー賞をはじめ、さまざまな賞に輝いた有名作品なので、本文のテレビドラマ以上に国際的な影響力は大きいかもしれない。

(11) なお、このドラマはDVDでも販売されている。捕虜收容所の日常生活を描くという点で、映画「戦場にかける橋」よりもイギリス人のお茶の間に深く入り込んだのではないかと思う。

(12) 日本軍が破竹の勢いで勝利を収めた背後には、現地における反英闘争などがあり、そのような独立運動と日本軍が連携したことが、日本軍の勝利を容易にしたことは言うまでもない。

(13) ロンドンにある帝国戦争博物館には、同じように戦場で押収された、個人の出征兵士におくられた記名入りの日章旗が保管されている(二〇九頁写真1参照)。

(14) ペリーが日本に開国を求めてやってきたのは一八五三年と一八五四年であり、一八五八年には亡くなっている。

(15) いかにもこのような表現だと、日本が一度に中国、ロシアを相手に戦争をし、打ち負かしたように取ることが出来る。

(16) ここで日本軍隊の泰緬鉄道建設の正当性が述べられている。死の鉄道博物館ではそのようなことは強調されていないが、とと思う。逆に、連合軍側がタイ領土に入って爆撃をした時にはタイ政府の許可を得ていたのだろうか。

(17) ここの記述では、日本軍の残虐性を強調するよりも、

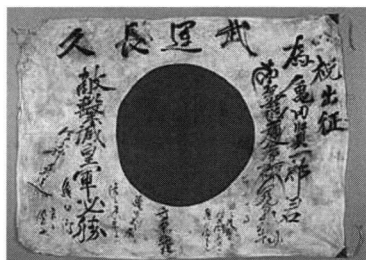
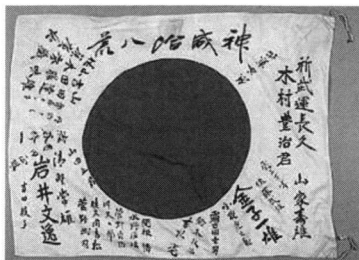


写真1 日章旗

戦争そのものの残虐性が淡々と述べられている。

(18) イギリス政府は日本軍の建設した鉄道を接収して、それをタイ政府に有償で譲り渡したということは、所有権はイギリス政府に戦利品として渡り、それをタイ政府に売却したことになるが、その場合に土地の所有権や利用権はどのように処理されたのであろうか。

(19) これについては、観光鉄道への乗車記念として渡された「誇りの証書」という紙の裏側に英文で「爆撃によって破壊された橋のパンは、戦争賠償の一部として日本企業によって修復された」と記載されている。

(20) これはDEATHを想起させるネーミングと言えるが、JEATHの由来は、Japanese、English、Austrian、Thai、それにHollandの頭文字を取ったものである。

(21) 博物館の主体性や戦争展示のありかたについては、以下の文献を参考。安田常雄「現代史研究と戦争展示」(注(9))『歴史展示のメッセージ』所収。